

クザーンヌス五百年祭に出席して

渡 辺 守 道

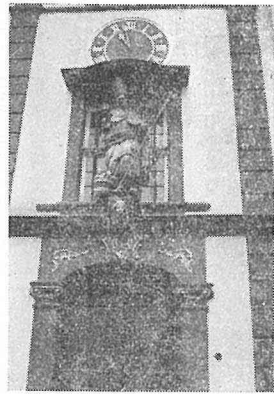
ニコラウス・クザーンヌス (Nicolaus Cusanus, 1401-1464) —
 ールネッサンス期に哲学、神学、政治思想、科学等あらゆる分野
 にわたって偉大な足跡を残した思想的巨人——に關しては、名
 前の割合にその詳細が余りよく知られていないと思う。筆者は
 一昨一九六四年夏約二ヵ月にわたって、米國哲学会 (American
 Philosophical Society) の好意的援助によつて歐洲に滞在し、
 クザーンヌス死去五百年を記念する二つの集りに出席した。また
 その前後には、ロンドンの大英博物館、ミュンヘン所在のヴィ
 ッテルスバッハ (Wittelsbach) 家の秘密文庫、フィレンツェの
 メディチ家設立のラウレンツィアーナ図書館 (Biblioteca Medici-
 cea Laurenziana)、ヴァチカン図書館等でクザーンヌス關係の古
 写本を調査する機会を与えられた。それで多少私事にわたるけ
 れども、これらの経験をしるし、クザーンヌスその人、また最近
 のクザーンヌス研究などに少し触れてみたい。

クザーンヌスは哲学史上「知的無知についで」(De Docta Ignorantia) の著者として知られているが、政治思想史上における「普遍的和合についで」(De Concordantia Catholica) の著者としての地位もますます重視されつつある。その上、教会法学者、枢機卿としても教会内で活躍し、又、人文主義者としては、

クザーンヌス五百年祭に出席して

喪失されていたプラウトス (Plautus, Titus Maccius : c. 254-184 B. C.) の劇を再発見したばかりでなく、当時いわゆる人文主義運動の先駆をなしていたトラヴェルサーリ (Traversari, Ambrogio : 1386-1439) 、ブルーニ (Bruni, Leonardo : 1370-1444) 、ベッサリオン (Bessarion, Cardinal : c. 1400-1472) 枢機卿らの人々と親交をもつた。又地理学にも深い興味をもち、最初の中歐の地図を作成、その上数学、医学、天文学、動力学の分野においても種々の著作を残して居る。一四五三年にトルコ軍によって東ローマ帝國の首都コンスタンチノープルが陥されて後は、キリスト教とイスラム教の対決、又宗教上の寛容という問題についても深い検討を加え、「信仰の和合についで」(De Pace Fidei) 及び「ローランの精査」(Cribratio Alchorani) という書を著している。レオナルド・ダ・ヴィンチといさゝか類似点をもつこの博学多彩な枢機卿は十九世紀の中期から次第に学徒の注目を集めて来ている。殊に第二次ヴァチカン公会議の開始と共に、教皇と司教、教皇と公会議の關係が再び問題となり、更にカトリック教会と他教会、ひいては他宗教との關係が再検討されるにつれて、十五世紀の公会議運動の理論を最も組織的に集大成したといわれる「普遍的和合について」の著者であり、又和合、調和という概念をその哲学的思索、政治社会思想の根底においたクザーンヌスには一層の関心が払われるに至り、一部では「クザーンヌス復興」の声すら聞かれている。

クザーンヌスは古写本の蒐集に深い興味をもち、ラテン語のものもとより、ギリシヤ語、ヘブル語の古写本も集めたが、一



聖ニコラウス養老院 (Hospital St. Nikolaus, 1450年創立) の入口 : 1962. 11. 1. 酒井修氏撮影

四五〇年に自分の故郷である南独のクースにキリスト在世三十三年を記念して三

十三人の貧乏な老人を收容しうる養老院を設立、その図書館に自分のコレクション一切を寄贈した。養老院と図書館は五百年の間、戦火を免れて依然として存在するけれども、クザーンヌス・コレクションの一部は大英博物館、ブラッセルの王立図書館、ヴァチカン図書館などに転出又は売却され、特に大英博物館のハーレイアナ (Harleiana)・コレクションは最近の研究によって重要な古写本を含んで居ることが明らかになって来た。筆者はそのコレクションの中のハーレイアナ三七一〇という教会法に関するものを検討する為一週間ロンドンに滞在、伝統と歴史の重さに圧せられたような、あの古くすすけた大英博物館の古写本部に通った。それは十四世紀、乃至は十五世紀にかかれた教会法の註釈書であつて、クザーンヌスの思想的発展に深い影響を持つと思われるものであつた。

さて五百年祭の第一の会合は、クザーンヌスの生地クースで行なわれた (Jubiläumsfeier zum 500. Todestag des Kardinals

Nikolaus von Kues)。この町はぶどう酒で有名なモーゼル河畔にあつて、現在は対岸のベルンキャストルと合同してベルンキャストル・クース (Bernkastel-Kues) と呼ばれている。

筆者は八月八日、町の中心を一寸はずれた安宿屋に旅装をとり、夕方、五百年祭開始を告げる教会の鐘が町中にひびきわたる中をリセプションのひらかれるクザーンヌス養老院にむかった。翌朝祭典会場たる、最近新たに建てられたクザーンヌス・ギムナジウムに行ってみると、予めプログラムを見て可成り多くの教会及び政界の指導者が来ると知ってはいたものの、思っていた以上の大仕掛な会合であることを知らされた。教会側は教皇パウロ六世の使節をはじめと多数の司教や司祭、又政界からは西ドイツ国会議長、州の文部大臣をはじめ多くの名士、それに各国の研究者が講堂を一杯にうずめている。一九六〇年にベルンキャストル・クースにクザーンヌス協会が設立され、その機関として近くのマインツ大学にクザーンヌス研究所が生れたが、その所長ハウプスト (Haubst, Rudolf) 博士が会合の運営に、又賓客の接待に多忙を極めている。

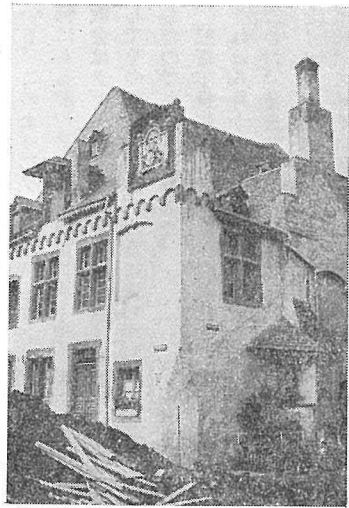
初日には型通りの祝辞のほかにクザーンヌス研究にこれまでもっとも貢献したケルン大学のコッホ (Köhr, Josef) 博士及びカレン (Kallen, Gerhard) 博士、それからカナダのマギル (McGill) 大学のクリバンスキー (Kihansky, Raymond) 博士が表彰され、ハウプスト教授から大きなクザーンヌスの画像の入った表彰状をうけたことが目ぼしいことがらであった。又初日 (八月九日) とクザーンヌスの昇天の日である八月十一日には市内のカトリック

ク教会における司教高座ミサだけでなく、プロテスタント教会においても記念礼拝が行われたことは注目にあたいる。しかし、ベルンキヤステル・クースの五百年祭における最も劇的な出来事は、八月十一日にキリスト教統一推進局長としてカトリック教会内で重要な地位を占めるベア枢機卿と、ギリシャ正教会のアテナゴラス総主教から予告なしに派遣されてきたフィンフィニス大主教が、席を並べて会合に出席したことであつたらう。クザールヌスは一四三七年教皇使節団の一員としてコンスタンチノーブルにむかい、又、ギリシャ正教会の使節団をフェララ・フィレンツェ公會議に招くことに成功し、その結果としてたとえ短期間とはいふものの一〇五四年以来分裂していた東西両教会の統一がもたらされたのであつた。又、クザールヌスはコンスタンチノーブルからの帰途、海上で知的無知という彼の将来の哲学体系を基礎づける概念が上から与えられたと告白している。このようにクザールヌスとコンスタンチノーブルは深い関係にあるが、フィンフィニス大主教も演説の中で、ギリシャ正教会はクザールヌスを依然として高く評価し、死去五百年祭を期してその尊敬の念をあらたに表わすべく自分をこの会合に派遣したのであると強調した。

五百年祭には儀式的な部分のほかには学問的研究発表もあり、それは八月十二日まで四日間継続した。発表された論文は合計二十六、発表者を国別にみると西ドイツ十四人、オーストリアとイタリアそれぞれ二人、アメリカ、ベルギー、カナダ、フランス、スペイン各一名といった分配であつた。日本人の出席者

は筆者の外に、ベルリン自由大学におられた国際キリスト教大学の酒井修助教授があつたことを記しておく。クザールヌスがいに多方面に興味をもっていたかはプログラムがよく反映しているといえる。初日にはクザールヌスの教会改革及び神聖ローマ帝国改革案などが論ぜられたが、第二日の主題は「クザールヌスの西欧精神史上における地位」についてであつて、クザールヌスとエックハルト、ボナヴェントラ、レイモンド・ラル、ペトラルカ、ルター、又 *Devotio moderna* との関係がとりあげられた。これらの発表には平均三百人、とくにルターとの関係の時などは満場立すい余地もない有様で、僅に五百人は来ていたのではなからうか。第三日の主題の「クザールヌスとその遺産」のもとでは、ロンドン及びブラッセルに存在するクザールヌス・コレクシヨンの古写本の研究、又ソルボンヌのガンディアック (*Gandillac, Maurice de*) 教授の「クザールヌスと国際理解」といった発表があつた。最終日にはクザールヌスと近代思想との関係で、彼の近代哲学への貢献のみならず天文学、数学、物理学、動物学及び医学への寄与がとりあげられた。祭典の四日間ドイツ的色彩が強烈であつたことは否めない。プログラム自体には発表はドイツ語に限るがその後は仏、英、伊語のいずれで討論をしてもよい、という注意書があつたものの実際のところ討論もドイツ語一点ばりであり、この点、後で出席したブレサノーネの会合とはよい対照であつた。これらの論文はすべて印刷され発表される筈である。

五百年祭の終了後一週間、ベルンキヤステル・クースにとど



ニコラウス・クザールヌス生誕の家(ベルンキャステル・コース)
1962. 11. 1 酒井修氏撮影

まり、クザールヌスの生家を訪れ、彼が幼年時代に船を漕いだであろう家の前を流れるモーゼルの河畔をさまよひ、養老院内の図書館に通ってホンマール院長とメインツのクザールヌス研究所ダントアー助手の援助をうけて二、三の古写本をしらべることができた。不慮の出火に備え、図書館は最近クザールヌス協会によって耐火装備がほどこされ、又現在図書館所有のすべてのクザールヌス・コレクシヨンの古写本のマイクロフィルム撮影も完了している。五百年祭のためにクザールヌスの生家も新しく塗装されていった。

そのあと、北伊ブレサノーネで開かれる国際クザールヌス学会までの一カ月近くの間に、トリエル、メインツ、ケルン、ミュンヘン、ザルツブルク、アウグスブルク、ジュネーヴをめぐった。幸いメインツ大学総長ベアマン (Bärmann, Johannes) 博士がクザールヌス研究者であるので博士に色々お世話になり、

同大学のクザールヌス研究所でハウプスト博士と再会することができた。メインツに五日間滞在した後ライン河を船で下り、あの大伽藍で有名なケルンについた。これまでは、クザールヌスは一四二五年にケルン大学に入学して哲学と神学を勉強した、といわれて来たが、最近の研究はクザールヌスはケルンでは哲学と神学のみならず法律史の研究を深くやり、その上多分教会法も教えたであろうということを明らかにしている。ケルン大学にあるトーマス研究所はウィルバート (Wilbert, Paul) 教授を所長にいたたく優れた研究所で、老大家コッホ、カレン博士なども依然としてそこに関係をもち研究をつづけている。各地の図書館の古写本からとったマイクロフィルムのコレクシヨンや、将来ハイデルベルクのアカデミーから出版される予定の種々の研究の原稿などもみることができて有意義であった。同大学のビザンチン研究所におられる上智大出身の和田広氏には色々とお世話になったことを感謝をもって記しておきたい。

ケルンの後に訪れたミュンヘンでは、そのヴィッテルスバッハ家の秘密文庫にある古文書をみるのが目的であった。ヴィッテルスバッハ家といえば日本の水戸家のようなもので、南独バイエルン地方を一一八〇年より一九一八年まで治めた名家である。史料編纂で有名なモニュメンタ・ゲルマニエ・ヒストリカの事務所などがある、がっしりした石造の、国立図書館の裏口の方からお入るお入って、門番に教えられた文庫のドアを押したら、中ではスマートな紳士がタイプライターにむかって仕事をしており、隣室では二人の研究者が読書中である。自

分の身分、職業、訪問目的などをのべたら、日本人がそんな研究をするとは不思議と思つたらしいが、「この文庫は御承知のようにヴィッテルスバッハ家のものであるので閣下の許可なしには古文書はおみせすることは出来ない。今電話できいてみるからすこし待っていただきたい」ということであつた。しばらくして彼が隣室から戻ってきて許可が得られたことを告げた時は全く嬉しかった。予め連絡もせずにとびこんだのであつたが、世界的学者であるコロンビア大学のクリステラー (Krieger, Paul O.) 教授からの紹介状をもつていたこと、その上に筆者が少しなりともこの分野で仕事をしていることなどが事を簡単にした理由でもあろう。

数日ここで研究をし、文庫が午後五時に閉鎖して後は色々見物もした。ただ郊外のテゲルン湖を訪れることができなかったのは遺憾であつた。クザースはこのテゲルン湖畔にあるベネディクト派の修道院僧たちと頻繁に手紙のやりとりをし、後年その修道院で余生を過すべく一室を用意しておいてもらったのだが、彼はついにテゲルン湖を訪れることが出来なかつた。そして筆者もその機会を逸してしまつたのである。

ドイツより飛行機でジュネーヴにとび、カルヴィンの教会や宗教改革記念碑などをみたあと、ブレサノーネにむかつた。アルプスを汽車で越すのは全く豪華な旅で、外の景色に目をうばわれるばかりである。ブレサノーネ (伊: Bressanone, 独: Brixen) は人口約七千の小さい町で、ブレンナー (Breuner) 峠とボルザーノ (Bozano) の中間にある。私は、国際クザース

クザース五百年祭に出席して

ス学会 (Internationaler Cusanus-Kongress) 開始の前日 (九月五日)、会場及び一部参加者の宿泊所のある一九六〇年設立のクザース・アカデミーにたどり着いた。一九一九年に南ティロール地帯がオーストリアからイタリアに割譲されて以来、両国間に紛争が絶えず、所謂「南ティロール問題」として関連にまで持越されたが、ブレサノーネはその地帯の殆んど中心地にある。新聞をみても、郵便局の掲示板をみても、街頭で話している人々に耳をかたむけても、ドイツ語とイタリア語の共存でなかなか複雑な状態ということは一目瞭然である。会場は殆んど準備が完了、三百程の椅子が並び、そのうちの大部分に園連で使われているような速時通訳の受話器がついているのが目につく。学会秘書のトーマス研究所のエッカート (Eckert, Wilhelm) 博士及びこの会合の準備に一番の責任をもつているパドヴァ大学のサンティネロ (Santinello, Giovanni) 博士が忙しくたち働らいている。ぼつたり玄関で逢つた坂本神父さんと同志社大学の高田武四郎教授も来ておられると聞き、うれしく思った。のちに上智大の野村良雄教授にもおあいしたから日本人は都合四人ブレサノーネにきていたわけである。

開会の儀式はベルンキヤステル・クルスのそれに優るとも劣らぬ盛大なもので、教会関係、政界、学界の指導者が多数参加した。教皇パウル六世が手紙でブレサノーネ司教に送つたことが伝えられたが、クザースがどのような地位をカトリック教会内で占めているかを良く示していると思う。開会式のうちに後に最も話題になつたのは、イタリアの文部大臣がその演説の

中で、聴衆中のオーストリアの文部大臣に話しかけるが如くに、クザーンヌスの和合、寛容という思想は現在の我々にも多く教える所をもっていると強調したことであろう。国境線で射撃の交換があり、負傷者もあったと伝えられたばかりのところであったから、文部大臣の言は一層深い意味を持ったことであろう。

ブレサノーネでは国際クザーンヌス学会の名にふさわしく色々な国語が使われ、研究発表者は西ドイツより十七人、イタリア八人、アメリカ四人、オーストリア、フランス、スペイン各三人、カナダ、エジプト、ハンガリー、ポーランドより夫々一人集った。筆者は現在アメリカの大学に関係しているので「クザーンヌスと寛容」という研究発表の際英語を使ったが、あとで三人の学者が質問に立ってくれたので大いに激励された。ベルンキャステル・クースの会ともう一つの違いは、毎日全員出席の会合があった後、二つのセクションに分れて会が進められたこととであった。研究発表の多様性ということはどこでも変りなく、初日の開会式の後、第二日の主題は「クザーンヌスと人文主義」及び「哲学及び神学上の諸問題」、第三日は「クザーンヌスの哲学史上における地位」及び「クザーンヌスの著作及び思想の解釈について」、第五日目は「教会政治」というテーマであった。第四日には全員バスでアルプスの遊覧にでかけ、クザーンヌスがブレサノーネの司教になってからバイエルン公ルードヴィヒとの紛争にまきこまれ、その結果ルードヴィヒが滞在中のクザーンヌスを襲撃しようとしたブルネック城をも訪問した。

ドイツからはカレン、ウィルバート、ハウプスト、ガドマー

(Gadamer, Hans-Georg) フォルクマンシュリック (Volkmann-Schluck, K. H.) など。フランスはガンディヤック、イタリアからはバタリア (Battaglia, Felice) ゼンティエーレ (Gentile, Mario) などの著名な学者が参加したけれど、ブレサノーネでの立役者はカナダのクリバンスキー教授であったといえよう。同教授は、一九二〇年代ハイデルベルクで Hoffman (Hoffmann, Ernst) 教授の指導下に二十世紀におけるクザーンヌス研究の先駆者の一人となり、のちオックスフォード大学及びロンドンのワールブルグ研究所 (Warburg Institute) で研究を継続、現在はマギル大学の哲学部長をしているが、そのクザーンヌスに関する蘊蓄の深さは勿論のこと、特色ある熱情的なしゃべり方、又英仏独伊を自由自在につかひこなすその巧みさ、出席していた一部の学生などは特に印象づけられたようである。同教授の著作からみて恐らくラテン語も自由に使いこなせると思う。ともかく、数カ国語を自由に使用しうる歐洲の学者の間において、我我東洋生れの西歐研究者は大いに不利な立場にあることを再び考えさせられた。

ブレサノーネの学会の後はやはり心も軽く旅を続けることが出来た。すぐ近くのパドゥアの町は一二二二年に設立されたパドゥア大学の所在地で、クザーンヌスはこので一四一七年より一四二三年まで教会法を学び博士号をとったのみならず幾多の人文主義者と交り、彼の数学、物理学、天文学、地理学などへの関心もパドゥア滞在中に深められたのである。パドゥアはまた後年ガリレオが教鞭をとり、ウィリアム・ハーヴェイが勉強し

たり、近代科学の発展と大いに関係が深い、筆者には、中世後期において恐らく最も大胆な反教会的意見をのべ、その故に異端者として破門され、後年をオッカムと共にバイエレンのルードヴィヒ公の宮廷に過した、「平和の擁護者」の著者。パドヴァのマルシリオ (Marshio da Padova, 1275-1343) の生地として興味が深かった。クザーヌスは「普遍的和合について」の第二巻でマルシリオに言及し、結局異端者マルシリオの説をしりぞけているが、第三巻のはじめには「平和の擁護者」からアリストテレスを孫引きしているに拘らず、そのことには全然ふれないで、恰も自分が直接に読んだかの如き書きぶりでありストテレスの「政治学」を論じている。一体どこで何時クザーヌスが「平和の擁護者」を読んだのであろうか。パドヴァ大学の当時の学生登録簿が現存しないのでクザーヌスのパドヴァでの活動は残念乍ら余り明瞭に知りえない。マルシリオにいたっては現在のパドヴァには片鱗もみられなかった。

次に訪れたフイレンツェの町については筆者が語る必要もない。ダンテ、ミケランジェロ、ダヴィンチ、メディチ家、マキアベリなど西歐史に著名な人々が生活し、又活躍した所である。しかし筆者の主なる目的はラウレンツィアーナ図書館にいて一古写本をみることであった。あいにく翌々日にならないと再開しないと知って落胆したがそのまま引下る事はないと思ひ図書館員に面接し、恩師クリステラー教授という名前を口にしたほせたらそのあとは事がすらすらとはこんだ。館長に電話をしその許可をえて、古写本をラウレンツィアーナからすぐ近くのリッ

クザーヌス五百年祭に出席して

カルディアアーナ図書館 (Biblioteca Riccardiana) に移出し、そこで使用許可するという異例の措置を取ってくれたのである。暖かい配慮であった。クザーヌスはパドヴァ在学時代にダヴィンチやコロンブスにも影響を与えたフイレンツェ生れのトスカネリ (Toscanelli, Paolo dal Pozzo: 1397-1482) と親友になり、フイレンツェの人文主義者によく知られるようになったが、南独モーゼル産のクザーヌスにパドヴァ、ヴェニス、フイレンツェなどに花をひらき始めていたルネッサンスの影響が大きかったことは否定できない。

満員の急行列車に三時間半殆んど立ちつづけでローマに到着したのは第二次ヴァチカン公会議第三会期のひらかれた日の翌日九月十五日であった。ローマの中心部のホテルに部屋をとり、なにはさておきサン・ピエトロ大聖堂を見なくてはとヴァチカンまで市内を見物し乍ら歩いた。翌朝早起し、八時半にひらくヴァチカン図書館に行き図書館使用のパスをもらった。丁度開会中のヴァチカン公会議は、司教職の地位と特権をめぐる教会の組織の問題とか、ユダヤ人はキリストを十字架につけた責任を負わさるべきかというような重要な問題を議論していたわけであるが、図書館の中では参考図書室で書をひもとく研究者や古写本室に写本ととくむ学者が外部の世界から隔絶された如く静かに仕事をしていた。しかし入口の署名簿に Alan Bullock が筆者の前に署名したのであるをみて、既に数カ国語に翻訳され、最近改訂版もでたあの名著「ヒットラー・専制政治の一研究」の著者がここで何の研究をしているのであろうと思ったことであ

る。

ヴァチカン図書館はクザールヌスの友人で書籍愛好家の教皇ニコラス五世によってその基礎がおかれ、現在の蔵書は尨大なものである。未整理で研究者の来るのを待っているものも無数といわれる。これがすぐれた参考図書室の存在とあいまって各国の学者をひきつける重要な理由であろう。クザールヌスは、やはり友人で人文主義者のエネアス・シルヴィウスが教皇となってピウス二世と称し、トルコ軍撃破の爲の十字軍を編成すべく一時ローマを離れた時に、教皇代理の重務を帯びたことがあるが、その時には書籍愛好家のことであるからヴァチカン図書館に出入りしたこともあったであろう。もともと現在のサン・ピエトロ大聖堂、図書館及び附属の建物は十六世紀後にたてられたものであるから、現在の図書館にクザールヌスが入り出したという事はありえない。ピウス二世は自伝を書いた唯一の教皇であるが、その「回顧録」の中で、クザールヌスがその教皇庁改革案が用いられず、教皇庁が腐敗していることを悲しんで、自分を隠退させてくれとピウス二世にねがって号泣した、と記している。あの壮大で豪華なサン・ピエトロ大聖堂や図書館といくつかの美術館を含む大建築が行われた時代に若し生きていたらクザールヌスは何といつたであろうか。

併しサン・ピエトロ大聖堂の所在地ローマはまたクザールヌスの永遠の憩いの土地ともなった。十字軍編成に苦悶するピウス二世を不意ながら援助すべくマントアにむかったクザールヌスは、ローマより遠くないトディで一四六四年八月十一日に死去

した。枕頭にかけてた友人の一人は医師であるトスカネリであった。遺体は遺言にもとづいてローマのサン・ピエトロ・イン・ヴィンコリ教会に埋葬されたが、心臓だけは故郷クースの養老院のチャペルに送られそこに葬られた。今日サン・ピエトロ・イン・ヴィンコリ教会の広場には多数の遊覧バスがとまって訪問者が絶えないが、彼等の殆んど全部は丁度百年後に死んだミケランジェロの有名なモーゼの像を賞讃するのみでクザールヌスの墓の存在をも知らずに立去って行く。筆者が訪れた時も、奥にあって照明燈にてらされ、見物人に囲まれたモーゼの像とは全く反対の、入口を入ったうすぐらい左隅にある、ペテロの前にひざまずいたクザールヌスの像には一人の訪問者もいなかった。そして誰かが捧げた花束の中のカードの「五百年を記念して」という字も殆んど読めない程であった。

哲学者として、神学者としてのクザールヌスについては今後も色々と議論され研究されるであろう。一昨年哲学者ヤースパースの「ニコラウス・クザールヌス」という本が出て、ハウプスト教授などはきびしい批判をしているけれど可成りひろく読まれているようである。オーストリアでは若い学者のデュプレ(Dupré, Wilhelm)博士夫妻が主要哲学神学著作を新たに独訳するという野心的な仕事をはじめている。アメリカでも最近カッシラーの名著「ルネッサンス哲学における個人と宇宙」が英訳されたが、その中でクザールヌスに関しては二章が費されている。新進の教会史学者ドーラン(Dolan, John P.)教授はやはり一昨年

クザーンヌスの主要著作の抜萃を英訳出版した。これらすべての基礎となるハイデルベルク版クザーンヌス全集も一九三二年以来既に八巻を数えている。ハーレイアナ・コレクションやブラッセルの王立図書館、その上にクースの養老院図書館のクザーンヌス古写本の研究がすすむにつれ、人文主義学者としてのクザーンヌスもますます重視されることであろう。

しかし、又、エキュメニズムの声が一層高くなり、第二次ヴァチカン公会議と共にカトリック教会組織の改革という事が重要課題となるにつれ、クザーンヌスをキリスト教内は勿論他宗教との和合を唱えた先駆者、「宗教改革以前の宗教改革者」として高く評価しようとする動きが一部にみられるのは理解にかなくない。ニューヨーク・タイムズ誌は、ヴァチカン公会議で最近決定された教会組織についての画期的変革に関する「エキュメニズムについて」と題する一昨年（一九六四年）十月七日の社説で、「反宗教改革は終わった」と将来の歴史家は第二次ヴァチカン公会議について評価するであろうと論じている。W・C・Cなどプロテスタント側のエキュメニズムと並んで、カトリックの側のこの流れは最近著しい。宗教改革後に開かれたトレント公会議以来プロテスタント諸教会及びギリシャ正教会に対して戦闘的批判的立場を取って来たカトリック教会が、教皇ヨハネス二十三世の第二次ヴァチカン公会議開始という劃期的事件以来、ごく短期間のうちにその戦闘的機構を解体し、二十世紀の世界にむけて開放された教会となりつつあることは誠に注目し値する。クザーンヌスの生きた十五世紀という時代はキリスト

教の歴史においてのみならず、西洋歴史一般においても、波瀾万丈の時期であった。教会内の分裂で一時は二人、後には三人も教皇が存在した混乱期はすぎたものの、公会議運動の高まりにより、教会とは何か、教会はいかに組織され又改革さるべきかが深刻な問題となり、その上欧州内ではボヘミア地方におけるフスの支持者らの抬頭により、又欧州外からはイスラム教徒であるトルコ人の脅威の増大によって、キリスト教徒の間には危機感が強まった時でもある。クザーンヌスの和合、協調の精神はこうした中で展開せられたのであった。筆者は「クザーンヌス復興」を容易に語り、彼をルターの先駆者と見做し、又十八世紀の理神論者にも似た「宗教の自由」の擁護者とみる人々には組しえない。しかしある点で共通した世界と教会のこの現在の変革の時代に当って、教会の組織、改革について、又信仰にもとずく和合、理解について、幾多の貴重な指示を今もクザーンヌスは与えうると深く信ずるものである。そして彼に対して更に多くの関心と注意が向けられることを願って、この報告を終えることにしたい。

(了)

（筆者）米國ニューヨーク、ロングアイランド大学
〔歴史・政治学部、政治思想史〕助教授。）

近著 Morimichi Watanabe: The Political Ideas
of Nicholas of Cusa, with Special Reference
to His De Concordantia Catholica (Gene-
va: Librairie Droz, 1963.